

# 窓辺

あんどろ  
安藤 隆敏

## 「教え子」が語ること

浜松科学館のような社会

教育施設にいと、お世話になった先輩やかつての勤務校の地域の方々、同僚、教え子や保護者など、関わりのあった方々と再会することが大変多くあります。

その度にタイムマシンに乗った気になりますし、このような人とのつながりに感謝しています。そして、その当時に全力で取り組んでいたかが問われているように感じます。特に、「教え子」という存在は、自身自身の教育実践について内省

させられます。

「放課後、よく虫の話をしていましたね。今、ぼくは昆虫の不思議さを子どもたちに伝える職業に就いています」「公園の樹木を調べているうちに庭師を志すようになりました」「子どもを連れて天文台に遊びに行っています」「岩石集めから始まって鉱石集めにはまってしまいました」「花の写真を撮っています」「親子自然観察会で会って以来ですね」など。自然への興味・関心を持ち続けたり、

わが子に広げたりしている教え子の姿を見ることは、まさに教師冥利に尽きます。

天野浩名誉館長の不屈の精神を培ったのは、高校の校長先生から何度も紹介された熊沢蕃山の言葉「憂きことのおこの上に積もれかし限りある身の力試さん」だと伺っています。そして、ノーベル賞という素晴らしい業績には、恩師、赤崎勇先生とのつながりも不可欠であったと拝察しています。

今しばらく、時空を飛び越えて教え子との再会を楽しみにすることにしませう。

(浜松科学館館長)